

「超政治」の政治責任

品川哲彦（関西大学）

ハイデガーの考える政治は彼の存在史や彼の力の形而上学批判の文脈で読まれねばならない。こう指摘する轟氏の著書を力作と認めつつも、私は、しかし、ハイデガーの存在論的（であるべき）思考には、時代状況に流通していて彼もまた共有していた特定の存在者にたいする存在的な判断がもちこまれ、特定の存在者への敵対を誘発していると考え（私はこの点をすでに2016年度日本哲学会大会シンポジウム「哲学の政治責任——ハイデガーと京都学派」で指摘した）。彼の反ユダヤ主義的発言が人種差別ではなく地盤喪失性への批判だとしたところで、地盤喪失性という語はディアスポラの民である現実のユダヤ人のことを目くばせしている。ドイツ民族の土着性の主張もまた歴史的事実に支えられている。超政治が現実の政治を超えるものならば、どうしてある民族がある特定の自然の一画を故郷だ（自国だ）と主張できるのかということこそを問いなおすべきではないか。